

Title	「の」「のだ」と「的」「是……的」
Author(s)	杉村, 博文
Citation	大阪外国語大学学報. 49 p.75-p.89
Issue Date	1980-09-29
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80798">https://hdl.handle.net/11094/80798</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「の」「のだ」と「的」「是……的」

杉 村 博 文

## 「の」「のだ」と「的」「是……的」

日語裏有箇「のだ」句、漢語裏有箇「是……的」句。這兩種句子、無論從結構上講、還是從意義上講都很相似。譬如：

- (1) 王君は 昨日 来た の だ。  
          ↓          ↓          ↓          ↓          ↓  
(2) 小王 是 昨天 来 的。

“だ”相當於漢語裏的“是”，但是由於日語要把動詞放在句末，所以“だ”和“是”就沒有放在相同的位置上。如果把“だ”挪到“王君は”後頭去，那麼(1)和(2)的詞序就完全一樣了。·「昨天来的」和「昨日来たの」都是名詞性結構、不過他們的內部結構並不相同。「昨天来的」是一箇離心結構(exocentric construction)、“的”是後附成分、使整箇結構變成名詞性結構。本文管“的”字叫“名物化後綴”。「昨日来たの」則是一箇向心結構(endocentric construction)、“の”是名詞、意義很虛、和英語裏的“one”相同。不過“の”是粘附形式、不能單獨運用。試比較：

- (3) 昨天来的   ←→ 昨日来た の  
(4) 昨天来的 人 ←→ 昨日来た 人

尽管「昨天来的」和「昨日来たの」在內部結構上不相同、但是從整箇結構來看、它們還是相同的、都是名詞性結構。

「のだ」句和「是……的」句都有一箇由判斷詞和名詞性結構組成的謂語。它們在不少地方表現出人意外的平行關係。譬如、(1)和(2)都是以“他来了”為前提着重說明他来的時間的。本文雖然是以「のだ」句和「是……的」句為研究對象的日漢語句法對照研究、但是主要目的在於澄清有關“的”字的已經討論很久的麻煩問題、即“的”字是名物化後綴？是語氣詞？還是時態助詞？為了回答這箇問題、文章裏提出了一些新的看法、不當之處一定難免、希望得到各位讀者的批評指教。

0：はじめに

- (1) 王君は昨日来たのです。

(1)を中国語（＝現代漢語）に訳すと

- (2) 小王是昨天来的。

となる。(1)と(2)は意味的にも構造的にも非常に似かよっている。意味的には、(1)(2)ともに「王君が来タコト」を前提とし、来たのは昨日来たのです、と解説を加える文である。構造的には、(1)

(2)ともに述部が名詞句(下線部)と判断詞(下点部)からなる文である。以下、(1)のような文を「のだ」の文と呼び、(2)のような文を「是……的」の文(略して「的」の文)と呼ぶ。(1)の「の」は、国語学では準体助詞と呼ばれている。(2)の「的」は、中国語学では、議論もあるが、最も有力な説を採れば、名詞性文法単位の後附成分(名詞性語法単位の後附成分)と呼ばれる。〈朱德熙(1961)(1978)〉しかしこの名称には結果論的な嫌いがある。本稿では「的」の側からの働きかけも考慮し、暫定的に名詞句化接尾辞(略して 名詞化接辞)と呼ぶことにしたい。本稿は、準体助詞「の」と名詞化接辞「的」の造る名詞句の性格を簡単に比較し、その比較を基礎に「のだ」の文と「的」の文に対し初歩的な対照研究を試みたものである。

#### 1：準体助詞「の」の細分——準代名助詞と準体助詞

(3)a. 私が書いた詩はかれの死を記念する詩です。

b. 私が書いたのはかれの死を記念する詩です。

c. 私が書いたのはかれの死を記念するためです。

(3b)(3c)の「の」を佐治圭三氏の説を採り、それぞれ「準代名助詞」「準体助詞」と呼び区別する。〈佐治圭三(1969)〉助詞とは自身だけでは文節を造ることのない附属語という意味であり、「準代名」とは代名詞に準じるものという意味である。「の」をこのように準代名助詞と準体助詞に細別する根拠は次の通りである。「私が書いたの」を例に採ると、「の」が準代名助詞である場合、「の」は代名詞的に書かれた何かの代わりとして使われている。そのため、その代替されたものが顕在化すると「の」の存在意義は失われ、

(4)\*私がこの詩を書いたのはかれの死を記念する詩です。

のように言えない。しかし、「の」が準体助詞である場合には、「の」は何者をも代替していないので次のようにも言うことができる。

(5) 私が(今日)(ここで) この詩を書いたのはかれの死を記念するためです。

準体助詞「の」の働きについて佐治圭三氏は次のように説明される。

上の文を体言化する働きをしており、というより、具体的な意味のない、形だけの体言として、上の文を受けとめる働きをしており、上の叙述にどんな要素が加わっても、その働きに変りはない。〈佐治圭三(1969)十三頁〉

「の」が準代名助詞である「私が書いたの」は“モノ”を表わし、「の」が準体助詞である「私が書いたの」は“コト”を表わすと言える。しかし構造的には両者は等しい。ともに「の」を被修飾語とする内心構造(endocentric construction)の名詞句である。意味的には如何にも透明無比な助詞ではあるが、「の」が体言であることに変わりはない。それは三上章氏の所謂「ガノ可変」からもわかる。〈三上章(1972)P234〉「ガノ可変」とは、修飾語句内の主格の「が」を「の」に換え得るということで、名詞が修飾語を承ける場合には、「私が棄てた女←→私の棄てた女」のように、ごく普通に「が」は「の」に換え得る。それが常にとは限らないが、準代名助詞の「の」、

準体助詞の「の」についても可能である。

(6) 彼女は徐悲鴻の画いたのが好きだという。

(7) 雨の降り出したのはお弁当をつめていて気がついた。

## 2：名詞句化接尾辞「的」

上掲の例(3 a)(3 b)を中国語に訳すと次のようになる。

(8) 我写的詩是紀念他的死的詩。

(9) 我写的 是紀念他的死的詩。

「的」は接尾辞である。「的」は上接部に吸着し名詞句を造る。その構造は外心構造(exocentric construction)である。この点が内心構造を造る「の」とは基本的に異なる。「の」が体言として修飾語句を承けているのに対し、「的」は接尾辞として上接部にくっついている。「我写的」は、意味的にのみ、「の」が準代名助詞である「私が書いたの」に等しい。構造的には内心・外心の別があり、機能的にも一方は名詞を修飾できるが(我写的詩),一方はできない(\*私が書いたの詩)というふうに異なる点がある。「我写的」が名詞句であるのに更に名詞を修飾できるというのは、日本語からみれば奇妙であるが、中国語の連体修飾は名詞句が名詞句を修飾するのが基本なのである。

「的」には準体助詞の「の」に相当するような働き——上接部と合体し“コト”を表わす名詞句を造る——も認めることができる。しかし「的」が造る“コト”を表わす名詞句のもつ機能は、準体助詞「の」のつくる“コト”を表わす名詞句のもつそれとは大きく異なり、ただ連体修飾語としてのみ文中に機能する。たとえば上掲例(5)の中国語訳は

(10) 我写這首詩是為的紀念他的死。

となり、

(11) \*我写這首詩的是為的紀念他的死。

とは決してならない。

## 3：名詞句化接尾辞「的」の細分——代替句化接尾辞と連体句化接尾辞

「S的」で動詞句と「的」が結び造る名詞句を代表させ、「S的N」で「S的」が名詞を修飾する連体修飾構造を代表させる。「S的N」は「S的」が「S的N」を代替しうるか否かで大きく二類に分かれる。たとえば：

(12) 我写的詩(私が書いた詩)

(13) 写這首詩的人(この詩を書いた人)

一定の文脈が与えられれば、「我写的」写這首詩的は「我写的詩」写這首詩的人を代替することができる。しかし

(14) 写這首詩的動機(この詩を書いた動機)

(15) 我写這首詩的動機（私がこの詩を書いた動機）

「写這首詩的」我写這首詩的は「写這首詩的動機」我写這首詩的動機を代替できないばかりか、被修飾語「動機」を離れては独立することさえできない。

ここで話を一般化しよう。動詞をVで表わし、 $n \cdot m \cdot p$ を次のように定義する。<sup>(1)</sup>「対象」という言葉は、動詞Vと本来的に関係を結ぶ「格」というほどの意味に読んで頂きたい。

$n$  : 「V的」で代替可能な対象の数

$m$  : 「V的」で代替可能な対象のうち、S内に実際に含まれているものの数

$p$  :  $n - m$

そうすると次のように言える。

「S的N」において「S的」が「S的N」を代替可能であるための必要十分条件は、 $n$ が「V的」で代替可能な対象のうちの一つであることである。そのときPの値は1以上（ $P = n - m \geq 1$ ）となる。もし $p = 0$ 、つまり $m = n$ であれば、「S的」は「S的N」の代替が不可能であるばかりか、Nを離れては独立さえ不可能な所謂end-bound formとなる。

これでもし「写」(書く)の $n$ の値が与えられたなら、上例(12)から(15)に見られた現象はすべて説明できる。「写」は $n = 2$ である。「写的」で代替可能な対象は「書く側(者)」と「書かれる側(者・物)」の二つしかないからだ。

(16) 写的是我→(……を) 書いたのは私だ。

→(……が) 書いたのは私だ。

「書いたのは書齋でだ／昨日だ」の意味で「? 写的是在書房裏／昨天」のように言うことは普通ない。<sup>(2)</sup>「我写的」だとS内に書く側が含まれているので、「我写的」は書かれた側の代理を務める。

「写這首詩的」だとS内に書かれた側が含まれているので、「写這首詩的」は書く側の代理を務める。「写這首詩的」が「写這首詩的動機」を代替できない理由はここにある。

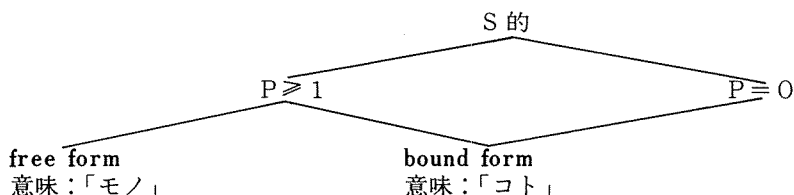
「写這首詩的動機」の「写這首詩的」は、「の」が準体名詞である「この詩を書いたの」に等しい意味、つまり“この詩を書いたコト”という意味を表わす。このような“コト”を表わす「S的」はPの数値如何んにかかわらず、被修飾語を義務的に必要とするend-bound formである。<sup>(3)</sup>この場合「的」は、連体修飾語としてのみ働く名詞句を造る接尾辞であると言えよう。

「我写這首詩的」はPの値がゼロ（ $2 - 2 = 0$ ）であるため、代替不可能、独立不可能となる。(16)をみれば「写的」が二義的であることがわかる。書く側、書かれる側両者の代理を務め得る。

「写的」のPは2である。つまり「S的」はPの値の数だけ代替すべき対象をもち得るのである。この点に鑑み、朱德熙はPを「S的」の多義指数と呼ぶ。〈朱德熙(1978)〉よってもし $P = 0$ であれば、「S的」には代替すべき対象が存在しないということになる。 $P = 0$ の「S的」が代替不可能となるのは当然である。そしてこのとき「S的」の表わすものは正しく“コト”である。よってそれは連体修飾語としてのみ働く。 $P = 0$ の「S的」が独立不可能であることの理由である。

以上で「S的」には意味・機能の異なる二種の「S的」が存在することがわかった。意味的に

見た場合、それは「の」の造る名詞句と状況はちょうど同じで、一方は“モノ”を表わし、一方は“コト”を表わす。 $P \geq 1$ の「S的」は常にambiguousである。“モノ”をも“コト”をも表わす。ただ、“コト”を表わす「S的」はend-bound formであって、連体修飾語としてしか文中に機能しない。ということは、 $P \geq 1$ の「S的」自体は常にambiguousであるが、それが被修飾語を伴わず単独で現われると、一義的に“モノ”の意味に解釈されるということである。この間の事情を図示すると次のようになる。



ここで以上述べ来たった事情に基づき、「的」を代替句化接尾辞と連体句化接尾辞の二つに分かちたく想う。「我写的詩」写這首詩の人における「的」は代替句化接尾辞である。以下「的<sup>n</sup>」と記し、「的<sup>n</sup>」の造る名詞句は「S 的<sup>n</sup>」と記す。「写這首詩的動機」我写這首詩的動機における「的」は連体句化接尾辞である。以下「的<sup>m</sup>」と記し、「的<sup>m</sup>」の造る名詞句は「S 的<sup>m</sup>」と記す。

ここまで動詞句が「的」と結び造る名詞句についてのみ見てきたが、「的」が形容詞と結び造る名詞句についても簡単にみておこう。(名詞は“コト”を表わす能力が本来的に欠如しているので「的<sup>m</sup>」と結ぶことがない。)

- (17) 好的書 (よい本)
- (18) 新的書 (新しい本)
- (19) 大的書 (大きい本)

「好的」新的」大的」は被修飾語「書」を離れ独立し、一定の文脈下で「好的書」新的書」大的書」を代替することができる。よって、この場合「的」は「的<sup>n</sup>」、つまり代替句化接尾辞である。形容詞は一往すべて  $n = 1$  と考えられる。そうすると、「好的」新的」大的」はすべて  $p = 1 - 0 = 1$  となる。

- (20) 我最美麗的時候 (私が最も美しかった時)
- (21) 楓葉紅了的時候 (楓の葉が赤くなった時)

「我最美麗的」楓葉紅了的」は  $p = 1 - 1 = 0$  であるため独立不可能である。このとき「的」は連体句化接尾辞「的<sup>m</sup>」である。

- (22) 彈跳力最好的運動員 (ジャンプ力が最もある選手)
- (23) 彈跳力最好的是楊希 (ジャンプ力が最もあるのは楊希である)

「彈跳力最好的」は  $p = 0$  のようであるが、被修飾語なしで独立している。これは「彈跳力」が「楊希」の譲渡不可能 (inalienable) な部分であることに帰因する。このような場合には、「譲渡不可能な部分+形容詞」を  $n$  が 1 である構造とみなす。「楊希的彈跳力最好的」は「S 的<sup>m</sup>」である。

#### 4:「是……的」の文に対する理解の分歧

- (24) 這首詩是我写的。(この詩は私が書いたのだ)  
(25) 這箇消息是我告訴他的。(このニュースは私がかれに知らせたのだ)  
(26) 我們的話他聽不進、媽媽的話他總是聽的。(私達の言うことは彼女は耳にはいらない、でもお母さんの言うことなら彼女だって聞かない訳にはいかない)  
(27) 出世不久的嬰兒是難看的。(誕生間もない嬰兒は醜いのだ)

上例の下線部はすべて被修飾語なしに独立している。つまり「S的<sup>1</sup>」である。しかしそれらが「モノ」を表わしているとは実感し難い。「この詩は私が書いたのだ」誕生間もない嬰兒は醜いのだ」の「の」が準「代名」助詞であると実感し難いのと事情はまったく同じである。ここから上例に於けるような「的」は、本来的にそうなのだ、間違いなくそうなのだ、という「語気」(modality)を表わす語気助詞であり、名詞化接辞(「的<sup>1</sup>」)ではないとする意見がでてくる。——例(24)(25)における「的」を過去時を表わす時態助詞だとみる説もあるが、これには別に考えねばならない事情もあるし、まったくの謬論であるのでここでは採り上げない。——一方は名詞化接辞だと主張し、一方は語気助詞だと主張する。この論争の歴史は短くなく現在もまだ結着をみていない。結局、この二つの意見は共に正しいと言わざるを得ない。ただ両者とも半分だけ正しいのである。構造主義的手続を踏んで種々の現象から帰納すれば、「的」を名詞化接辞だとするのが妥当であると認めざるを得ない。〈朱德熙(1961)(1966)(1978)〉が、逆にネイティブの語感・内省に基づけば、「的」を語気助詞だとする意見に軍配を挙げたくなる。しかし両者とも絶対ではない。多様な現象の前にはともに自圓其説が困難な場合がある。詳しい議論は後に回し、一点だけ指摘してみよう。「這首詩是我写的」は「是」無しでも普通に成立する。これは、名詞述語文では判断詞「是を用いるを常とする、用いないのは例外である」という指摘と矛盾する。〈呂叔湘(1979) P 81〉「我写的」を名詞句であると主張するのなら、それが一体どういう性質の名詞句であるのか説明する必要がある。逆に「的」を語気助詞だと主張する側は、しばしば「出世不久的嬰兒是難看的」の類いの文を例に採り、このような文においては「是」のみならず「的」も省略可能で、「是」的の省略後も基本的意味に変化はない、よって「的」は語気助詞であり名詞化接辞ではない、という議論をする。しかしこれは無茶な議論で、このような論が可能なら「好的書 新的書」の「好的」新的まで名詞句であることを否定されねばならない。なぜなら「好的書 新的書」と「好書 新書」の基本的意味に変化はないからである。

「的」の文を考えると、国語学が「のだ」の文をどのように処理しているかが大いに参考になる。簡単にみてみよう。

#### 5:「のだ」の文——「の」の名詞くずれ

「のだ」が準体助詞の「の」と断定の助動詞「だ」から成っていることに疑問の余地はないのだが、もはや一体化した一箇の助動詞としてみた方が妥当なのではないかと想わせるものが「のだ」

にはある。(ここから準体助詞を広くとり準代名助詞をも含むものとする。)

(28) 雨が降り出したのはお弁当をつめていて気がついた。

(29) 姉の言葉に私は胸がつまるのを感じた。

上例の「が」は「の」に換え得る。すでに述べた「ガノ可変」である。しかし「が」を提題の助詞「は」に換えることはできない。

(28)' \*雨は降り出したのは……………

(29)' \*……………胸はつまるのを……………

これは「雨が降り出したの」胸がつまるの」が「の」を被修飾語とする連体修飾構造であることを示している。<sup>(4)</sup>比較せよ。

(30) 雨が／の／\*は降る中を一人帰る。

(31) 胸が／の／\*はつまる言葉だった。

しかし「の」が「だ」と結び「のだ」となると修飾語句中の「が」は「ガノ可変」でなくなる。

(32) 雨が／\*の突然降り出したのだ。

が、逆に「雨」を主題に仕立てて

(33) 雨は突然降り出したのだ。

とすることができ。もっとも(33)は「雨は(突然降り出したの)だ」が正しい分析かも知れない。それはともかくとしても、「のだ」の文では「ガノ」が可変ではなくなる。つまり「……………の+だ」という環境にあっては、準体助詞「の」の体言としての性格がほとんど失われているのである。三上章氏の言葉を借りれば、「の」は「完全に名詞くずれしている」(三上章(1972)P235) 佐治圭三氏は

「のだ」は動詞文や形容詞文を名詞文に変えるものだ、と、一往言うことができるであろう。

〈佐治圭三(1972)十五頁〉

と認めた上で次のように述べておられる。

では、「のだ」の文は、普通の品定め文(ここでは名詞文)。ことにも、「富士山は高い山です」

「富士山は駿河にある山です」「富士山はあの人たちが登った山です」などの、連体修飾語をもつ文と、どう違うのであろうか。

それは、「の」が「ガノ可変」でない準体助詞である点に求められねばならない。ということとは、このような「の」に上接するのは連体修飾語の連体形ではなくて、述語の連体形だということであり、「の」が上を十分受け止めずに、述語の連体形を下の「だ」に結びつける、連結器の役割だけを果しているものだということである。(波線、下点原文のまま)〈佐治圭三(1972)二〇頁〉

「述語の連体形」は、三上章氏の言葉で表現すれば「述定的装定」(nexus 的 junction)となる。〈三上章(1963)P111〉「のだ」の場合、修飾語句をしかと承けとめるべき被修飾語「の」の形式化が極端であるため、連体修飾構造の重心がcenterである「の」から前の修飾語句へと移り、残さ



れた「の」は、もはや前の修飾語句とよりもむしろ後の「だ」とより緊密に結ぶ様相を呈し、「のだ」となりムード化の方向に進むのである。「わけだ」はずだ ようだ そうだ 等と連ってくる。

#### 6:「是……的」の文——「的」の名詞化接辞くずれ

「的」の文にも「のだ」の文と性質を一にする問題がみられる。「のだ」の文では「の」の名詞くずれが問題であったが、「的」の文では「的」の名詞化接辞くずれという問題になる。

まず、中国語では名詞句は一般に単独では述語になれない。名詞述語文では、判断詞「是を用的を常とする、用いないのは例外である。」(呂叔湘(1979)P81) たとえば

(34)a. \*他 中国派来的留学生。

b. 他是中国派来的留学生。(かれは中国が派遣して来た留学生だ)

(35)a. \*「春望」 杜甫写的一首诗。

b. 「春望」是杜甫写的一首诗。「春望」は杜甫の書いた詩だ

ところが、「的」の文では「是」は必ずしも必要ではない。これは学校文法においても紹介されている現象であり、決して「例外ではない。

(36) 那壶裏的水熱的。(そのポットのお湯は熱いのだ)

(37) 我的這件毛衣媽媽給我織的。(私のこのセーターはお母さんが編ってくれたのです)

(38) 電話誰接的?(電話は誰が受けたの)

(39) 我們坐飛機去的。(私達は飛行機に乗って行ったのです)

これを「是'可略」と呼ぶことにしよう。「のだ」の文でも「だ」は可略である「電話は誰が受けたの」の「の」は、終助詞とみるよりも「だ」の省略とみるべきであろう。「だ」省略の「のだ」の文は往々にして口語的で、女性の言葉に多くみられるが、「是」省略の「的」の文は口語的であるとは言えるが、女性的な性格はない。とにかく、「的」の文においては、「S的」が名詞句であるにもかかわらず「是'可略」である。このことは「的」の文の「S的」が名詞句という名にふさわしくないものになっている証しであり、それはとりもなおさず、名詞化接辞という名が「的」にふさわしくない証しとなる。

次に、上で $P=0$ のとき「S的」はend-boundな連体修飾句(「S的<sup>m</sup>」)であり、必ず後に被修飾語を伴うと述べたが、 $P=0$ の「S的」が被修飾語を伴わず現われる場合がある。<sup>(5)</sup>

(40) 是王大夫把他的病治好的。(王先生がかれの病気を治したのだ)

(41) 是小張把這張票給我的。(張君がこの券を私にくれたのだ)

(42) 誰讓你爬樹的?(誰がお前に木に登れと言ったのだ)

(43) 是什麼促使他想出這樣的主意来的?(何がかれにこのような考えを想いつかせたのか)

朱德熙はこの点に想いあぐね、例文中の下線部を「S的」のmから排除することによってこの矛盾を解決しようとした。たとえば(40)だと

(40)' (是王大夫)(把他的病治好的)

のように分析するのである。こうすれば、Pが、 $P = 2 - (2 - 1) = 1$ となり、 $P = 0$ の「S的」は必ずbound formであるという規則に例外がなくなる。そうして朱德熙は、(40)のような文はすべて主語（「把他的病治好的」）が後置された文だと述べ、次のようにparaphraseできることをその理由とした。（朱德熙(1978)）

(44) 把他的病治好的是王大夫。（かれの病気を治したのは王先生だ）

朱德熙のこの説は採れない。(40)(44)は三上章氏の用語を借用すれば、それぞれ陰題の文と顕題の文である。(40)(44)の日本語訳について言えば、

(45) 王先生がかれの病気を治したのだ。←陰題

(46) かれの病気を治したのは王先生だ。←顕題

しかし、三上氏は(45)と(46)の「の」を同じものとはみていない。(45)の「の」は「ガノ」不可変を根拠に準体助詞から切離され、「のだ」という準用言（準詞）を構成するものとみなされている。（三上章(1972) P 235）三上氏同様、陰題と顕題の対応に着目した朱德熙の慧眼は評価されねばならないが、「S的」に対する記述——それはつまりところ「的」に対する記述なのであるが——の一貫性を求める余り、両者を等価なものとし、陰題の文を(40)‘のように分析するに到ったのは行き過ぎだと言わざるを得ない。<sup>(6)</sup>朱德熙自身気がついているように、陰題と顕題を等価なものとする、両者が対応しない例の説明に窮する。

(472. \* 是老王被敵人打傷的。←陰題（王さんが敵に打たれて負傷したのだ）

b. 被敵人打傷的是老王。←顕題（敵に打たれ負傷したのは王さんだ）

(482. 是什麼原因把他毀的？←陰題（何がかれをダメにしたのか）

b. \* 把他毀的是什麼原因？←顕題（かれをダメにしたのは何だ）

陰題の文は、特定成分（「是」直後の名詞成分）の指定強調という語気以外に、どこか心理的に急迫し、言葉が口を奪って跳び出した感がある。ゆっくり思考をめぐらせた言葉ではない。主題—解説という二項に仕分けされる以前のものである。このことと、陰題の文では例(47a)のように「受身」が成立しない、「否定文」が稀である、という指摘は関連があらう。

$P = 0$ の「S的」が被修飾語を伴わず現われる場合、その原因はやはり「的」の名詞化接辞くずれに求めるのが賢明であると考ええる。

那壺裏的水熱的。

這首詩我寫的。

王大夫把他的病治好的。（「かれの病気が治った」という状況を主語にもつと考える）

「的」の名詞化接辞くずれの結果、上例の下線部は述語として機能している。「述語の連体形」にならって言えば、「述語の名詞句」と言える。

7：「のだ」の文と「是……的」の文の本質

「のだ」の文：「……(の)」は述語の連体形+(の)

「的」の文：「……的」は述語の名詞句

ここで見落されてならないのは、中国語の名詞句は同時に連体形であるという事実である。

(49) 熱的水(熱いお湯)

(50) 我写的詩(私が書いた詩)

(51) 王大夫把他的病治好的消息(王先生がかれの病気を治したという知らせ)

「のだ」の文と「的」の文の対応関係は以下の通り：

S の = S 的 \* (名詞句)

S = S 的 (連体形)

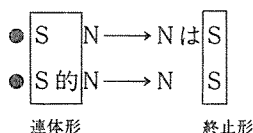
だ = 是 (判断詞)

\*S：上接部

連体修飾構造から「のだ」の文、「的」の文への展開は次のようになる。



ゆえに、「のだ」の文、「的」の文の本質は、連体形（或は連体法）にこめられた判断とは何かを知ることによって理解される。言葉を換えていえば、連体修飾構造から文へと展開されるとき、以下のように終止形（法）へと展開せず、



「述語の連体形」述語の名詞句(=連体形)へと展開するのはなぜか、ということである。佐治圭三氏はこの間の事情を次のように分析されている。

「の」は何もつけ加えないのに、なぜ「のだ」という形にする必要があるのか。それは連体形、ないし「述語の連体形」という形で表わされる判断のあり方に秘密があるのではないか。

「この花は美しい」

「この美しい花」

の二つを比べてみると、終止法としての「美しい」には話し手の主対的な判断が話し手の側のみから言えるものとして表現されているのに対して、「美しい花」の「美しい」にこめられている判断は、話し手の側のみで成り立つものとしてではなく、聞き手の側でも当然そう思うべきものとして、あるいは、一般に当然そうであるはずのものとして表わされている。いわば、判断が客体化されている——もうすでに成り立っているものとして表わされている——。(中略)

「述語の連体形+の」は判断を客体化する（なにものをもつけ加えずに）ための形式であり、

「のだ」は一旦客体化された判断をもう一度話し手の側から判断する形式だ、ということになる。(私信)

「のだ」の文に対する佐治圭三氏のこの論断は「的」の文にもそのまま適用可能だと考える。上述の通り「のだ」の文と「的」の文の間には“完全”な形式上の対応がみられる。「的」がもつとされてきた、本来的にそうなのだ、間違いなくそうなのだ、という語気は、一旦客体化された判断を改めて話し手の側から肯定するという操作の所産であると考えべきであり、ここにおいて名詞化接辞であり語気助詞であるという矛盾が統一されるのである。

上で「の」の名詞くずれ、「的」の名詞化接尾くずれという現象に言及したが、少し補充しておきたい。それは「くずれ」の程度は一樣ではないということである。たとえば、「の」の名詞くずれの判定には「ガノ」不可変を根拠にしたが、この可変不可変は截然と分かち得るものではない。

a. この絵は私が画いたのだ。(この絵は私が画いたものだ)

b. かれの肖像は私が画くのだ。(＊かれの肖像は私が画くものだ)

aは「ガノ」可変と言えなくもない。しかしbはだめである。

a. ? この絵は私の画いたのだ。

b. ? ＊かれの肖像は私の画くのだ。

「的」の方は、「S 的」が「不是」(……ではない：一般に名詞句の否定に用いられる)で否定可能か否かでその「くずれ」の程度がわかる。

c. 他(是)昨天来的。(かれは昨日来たのだ)

d. 他(是)会来的。(かれはきっと来る←(来るのだ))

cの「昨天来的」は「不是」で否定できるが、dの「会来的」はできない。

c. ? 他不是昨天来的。

d. ? ＊他不是会来的。

「の」的「くずれ」の程度は環境に応じて上下する。しかしそれで「くずれ」の存在を否定したり、逆に「の」が準体助詞であり、「S 的」が名詞句であることを否定したりすることは賢明ではない。

## 8：余論「的」時態助詞説とその由来

(52) 誰説了？(誰が言った)

(53) 我什麼時候説了？(私がいつ言った)

(52)(53)は反語でしかあり得ないようである。おまえは言った、という相手に対し、「我没有説」(私は言っていない)と反駁を加える反語である。中国語には日本語の「カ」に相当するような終助詞が無いので、いま仮に「Q」でそれを代表させよう。(52)(53)は反語にしかならないので、疑問は「説了」に専ら向ってゆくと考えられる。(52)(53)は

(52) ? 誰<<説了>Q> ?

(53) 我什麼時候<<說了>Q>?

と表わせるだろう。では、言ったかどうかではなく、言ったのはわかっているが、それは誰がだ、いつだったのか、と疑問詞の「誰」什麼時候」に疑問を向けたらどう言えばよいのであろうか。簡単である。時態助詞「了」を名詞化接辞(くずれ)の「的」に換えさえすればよい。

(54) 誰說的?(誰が言ったのか)

(55) 我什麼時候說的?(私はいつ言ったのか)

「誰」什麼時候」に疑問が向かって行くことを明示化しなければ、それぞれの前に「是」を加える。

(56) 是誰說的?

(57) 我是什麼時候說的?

(54)(55)は次のように表わせばよいであろう。

(54) 誰<<誰>Q>說的?

(57) 我<<什麼時候>Q>說的?

一説に(52)(53)にみられるような「的」は過去時を表わす時態助詞だというのが<sup>(7)</sup>なるほど、(52)(53)の「了」と(54)(55)の「的」は構文上同じ位置に来ている。つまり、見たところ両者はパラディグマティックな関係にある。一方が時態助詞なら、もう一方も時態助詞であると考えて不思議はない。次のようには普通言わない。

(58) \*誰說了的?

(59) \*我什麼時候說了的?

しかし「……了的」という表現が無い訳ではない。

(60) 這箇方案是趙書記批准了的。(この方案は趙書記が批准したのです)

(61) 九年前、不是他無緣無故地把你扔了的嗎?(九年前、かれがお前をわけもなく棄てたのではなかったか)

このような例から「了」と「的」はパラディグマティックな関係ではなく、シンタグマティックな関係にあることが理解できるし、「的」を時態助詞だと考えることが誤りであることもわかる。しかし「……了的」の例は「……的」の例に比してやはり少なく、「了」的」が共起できない場合も少くない。(58)(59)はその例であり、(60)(61)の「了」は無くても差支えない。<sup>(8)</sup>

すでに諸家の説くごとく、「了」はまさしくその文字通りに「完了」を表わすのであって、現象の発生、行為の遂行が確かに完了したと確認するためのものである。そうして、極論してしまえば、話し手の視点、情報の焦点が完了の確認からよそへ移ってしまえば、たとえすでに発生した現象、すでに遂行された行為を言う場合であっても、「了」は時には可有可無なものとなり、時には有ってはならないものとなるのである。たとえば、次の例において「了」の使用不使用は、完了の確認を意図するかしないかにかかってくる。

(62) 昨天他們上午參觀「了」人民公社、下午訪問「了」社員家庭。(昨日かれらは午前中人民公社を見学し、午後公社員の家庭を訪問した)

これとは逆に、未だ発生、遂行をみていない現象、行為であっても、その発生、遂行の実現が希求されたり、仮定されたりする場合には、「了」は不可欠の要素となる。たとえば、

(63) 你笑一箇我才喫呢、笑了！笑了！（笑ってくれなきゃ食べませんよ、さあ、笑った、笑った）

(64) 快把他殺了！（早くこいつを殺してしまえ）

(65) 喫了藥再睡吧！（薬を飲んでから眠りなさい）

「了」のこのような性格に想い至れば、(58)(59)がなぜ言えないのかはすでに明らかである。(58)(59)において話し手の視点・情報の焦点は、言ったか否かの確認・主張にあるのではない。言ったことはすでに明らかな状況・前提として取り扱われている。それは(54) (55)における「Q」の掛り具合が証明してくれている。そのような状況において「了」を添えることはまさに蛇足である。すでに上で、名詞句（＝連体形）における判断は客体化されている——その客体化の程度は均質ではないであろうが——と述べた。完了の確認・主張というモーダルな色彩の強い「了」の脱落は、当然このことともあわせ考えられるべきであろう。

「的」を過去時を表わす時態助詞だとみる考えは、「的」の文がどういう状況を前提としているかを看過している。過去時は「的」に帰すべきではない、前提となっている状況にこそ帰すべきなのだ。所謂“時態助詞”「的」を含む「的」の文にはいくつかのヴァリエーションがあるが、ここで注目すべきは、そのような「的」の文において、述語の一構成要素である動詞に情報の焦点が当てられることはなく、焦点は常に動詞を圍繞し種々の関係を結ぶ参与者（物・事）に当てられるということである。以下の諸例において情報の焦点は下線部にある。

(66) 2、我(是)昨天写的詩。(私は昨日詩を書いたのです)

b. (是)我写的詩。(私が詩を書いたのです)

c. 我(是)写的詩、他(是)写的散文。<sup>(10)</sup>(私は書いたのが詩です、かれは書いたのが散文です)

d. 這首詩(是)我写的。(この詩は私が書いたのです)

この事実、動詞が表わす事態の発生の実現が前提として取り扱われていることを示す有力な左証である。以下の諸例は「的」の文の過去時を前提となっている状況に帰すべき道理を如実に物語っている。

(67) 婆婆死了、四箇鐘頭以前死的。(お姑さんが死んだ、四時間前に死んだの)

(68) 半年来我一共画了四張画、多半還是夜裏画的。(この半年間に私はあわせて四枚の絵を画いた、多くはそれも夜中に画いたのだ)

(69) “徐書記来了！”“怎麼来的、……”“是坐自己的車子来的、……”（「徐書記が来ました！」

「どうやって来たのだ、……」「自分の車に乗って来たのです、……」）

ここに見られる「了」が先に「的」が後に出る現象を「先了後的」と呼ぼう。「了」と「的」は“起”と“承”の関係にあり逆転することはできない。この「先了後的」という現象が「的」の文に限られた現象ではないことに注意しなければならない。<sup>(11)</sup>

(70) 我写了一首诗。(私は詩を一首書いた)

→ a. 我写的诗很蹩脚。(私の書いた詩はまずい)

→ b. 我的诗写的很蹩脚。(私の詩は出来がよくない。)

「先了後的」に対応すると想われる「シタ」と「シタノダ」の関係はどうなっているのだろう。三上章氏は「何タスル・シタ」を単純時、「スル・シタ+ノデアル・ノデアッタ」を反省時と呼び対立させた上で次のように両者の違いを説明している。

「何タシタ」はいきなり言う言方であり、反省時の方は連体命題「何タシタ」と提出「ノデアル」との間に隙間というか余裕というか、或る反省的な距りが介在する。だから単なる報告でなく解説という調子が出てくる。

単純時は報告であって、センテンスの一つ一つが独立して使われ、順々に言いつづけられて体裁をなして行くが、反省時による解説は文脈の解説をめざすものだから、何らかの場合を前提として使われるものである。つまり前文と関係的に出てくるものであって、その続き具合は順でなくて「逆」である。〈三上章(1972) P 238〜〉

続き具合が「逆」というのは

(71) 小李的病好了、是王大夫把他治好的。(李君の病気が良くなった、王先生が治したのです)

のような続き具合である。この三上氏の「反省時」という考えが「的」の文の“過去時”を考え上で、どこまで有効であるかは今後に残された課題であるが、大きな示唆を与えてくれることだけは疑えない。

1980. 3. 30

- (1) 以下の議論は朱德熙(1978)に負う部分が少くないが、私見も多い。たとえば、nの決定方法は朱氏と異なる。
- (2) 「是在書房裏写的」是昨天写的」という。
- (3) 「還是不要看的好」(やはり見ない方がよい) のような「還是……的好」という固定したパターンでは、“コト”を表わす「S的」が被修飾語を伴わず現われることがある。ただしこのような表現は北京語ではなく、北京語では「還是不要看好」という。
- (4) 「は」は「今日は行けない人は申出て下さい」よせてはかえす波」負けてはならないのが横綱だ」のような対比提示の場合を除き連体法の中には収まらない。
- (5) この種の文の特徴として
  - 「是」直後の名詞を指定強調する。
  - すでに発生した事件を言う場合にしか使えない。
  - 「受身」が成立しない。しかし「是」直後の名詞が疑問代名詞だと「受身」が成立する可能性がある。「是誰先被特務打中的?」(誰が先に特務に撃たれたのだ)
  - 否定文が稀である。本文例(6)参照。
  - 「陰題」の部分を指示代名詞「這」那」で提示することが可能である。「這是我母親讓她來看我的」(これは——彼女がやって来たのは——私の母が彼女に私を見にこさせたのだ)等を挙げることができる。
- (6) この種の文は会話体の文などにおける一般的な倒置文とは異なるという指摘が陸俊明(1980)にみえる。
- (7) 趙淑華(1979)をその代表とすることができる。支持者は少くない。
- (8) 「……了的」が可能か否かは動詞の性格ともかかわってくる。この問題は稿を改めて考えてみたい。
- (9) この種の文の「的」の後の名詞句は旧い情報(old information)であるのが普通のようなのだ。

a. 我是去年年底買的那輛自行車。(私は去年の年末にあの自転車を買ったのです)

b. ?我是去年年底買的一輛自行車。

bは不自然である。「的」を「了」に換え、「是」をとればよい。またこの種の文は形式と意味の間に大きなズレがあることで知られている。たとえば、aは直訳すると「私は去年の年末に買った自転車です」というナンセンスな文になる。日本語にも「教師だって徹夜で考えた問題だ、一夜漬くらいでは良い点は取れない」女のことも、老夫婦はほかから聞いた噂だったのような表現がある。(後の例は松本清張「水の炎」より)両者とも過去の事を言う場合にしか使えないなど意外な共通性がある。稿を改めて考えてみたい。

(10) 「是」が無いときは、「我」他」の後にポーズを置く。

(11) 杉村博文(1979) 参照。

#### 参考文献

- 金丸邦三(1966): 中国語時態接尾辞deについて、一橋論叢第55巻第5号
- 陸倅明(1963): “的”的分合問題及其他、語言学論叢5、北京大学中文系  
——(1980): 漢語口語句法裏的易位現象、中国語文 ’80, 1
- 三上章(1963): 日本語の構文 くろしお出版  
——(1972): 現代語法序説 くろしお出版  
——(1972): 現代語法新設 くろしお出版
- 呂叔湘(1979): 漢語語法分析問題、商務印書館
- 大河内康憲(1975): 「是」のムード特性、大阪外国語大学学報33
- 佐治圭三(1969): 「こと」と「の」——形式名詞と準体名詞——〈その一〉、日本語・日本文化No 1、大阪外国語大学留学生別科  
——(1972): 「ことだ」と「のだ」——形式名詞と準体名詞——〈その二〉、日本語・日本文化No 3
- 杉村博文(1979): “得”字構造と“的”字構造、中国語234、大修館
- Teng Shou-shin (1979: Remarks on cleft sentences in Chinese, Journal of Chinese Linguistics vol 7
- 寺村秀夫(1977—78): 連体修飾語のシンタクスと意味、日本語・日本文化No4~7
- Y. R. Chao (1955): Formal and Semantic Discrepancies Between Different Levels of Chinese  
歴史語言研究所集刊vol 28
- 趙淑華(1979): 關於“是……的”句、語言教學與研究 ’79, 1、北京語言學院
- 朱德熙(1961): 說“的”、中国語文 ’61, 12  
——(1966): 關於《說“的”》、中国語文 ’66, 1  
——(1978): “的”字結構和判斷句、中国語文 ’78, 1, 2